変人博士と獣人少女

ハニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変人博士と獣人少女

【Ｎコード】
Ｎ２２６８Ｎ

【作者名】
ハニー

【あらすじ】
街では有名な変人魔法学者ジャス・クーランとそのメイド兼保護者の亜人の少女マナの日常。それは平凡とはかけ離れた日常。
ほのぼの系ファンタジーを目指して書き上げたいと思います。

出会い

【４月１４日】
大変なモノを見つけてしまった。亜人の少女だ。どうやら怪我をしていたらしく、私の見つけた時は酷く衰弱していた。
どうにか家へ連れ帰って応急処置はしたが明日には病院へ連れて行かねばいけないと思う。

ここまで書いて、私はベッドの上で眠る少女へ目をやった。身体中に巻かれた包帯が痛々しい。慣れない治療魔法をかけてやったが、私の魔法がどこまで効くか……。
彼女が目を覚ましたら病院へ連れていこう。亜人といっても人間と大差無いだろう。

一番心配なのは私が人拐いに見られているかもしれない、という事だ。もしもそう思われていたらかなりショックだ。傷付く。

しかし、今日は何処で寝ようか……。一つしかないベッドには少女が眠っている、おまけに怪我人だし。
仕方無い、今日は椅子で眠るか。

私はクローゼットから長いこと使っていない毛布を引っ張り出して、それをかぶって眠りについた。

博士の憂鬱？（前書き）

博士は変人ですが変態ではありません。今回は少女と博士がなんとなくバタバタと互いの理解を深めます。

博士の憂鬱？

翌日の１５日。私は朝早くから目が覚めた。やはり椅子で眠るのには慣れていないようだ。腰や背中、身体中が痛い。

まだ重い瞼を擦ると、ベッドに眠っているあの少女が見えた。しかしこの少女は一見すると普通の人間だ。亜人だということを一瞬忘れてしまう……。

我々人間の耳が有る所は髪の毛に隠れてしまっているが、恐らくソコには何も無いのだろう。その代わりに頭の両脇には毛に覆われた猫の様な耳が生えていた。あと羊のような角も。

強烈な好奇心に襲われて、悪いと思いながらも少し耳に触れてみた。思った以上にふわふわとしていた。どうやら髪の毛よりも数段細い毛で覆われているようだ。

「……ん」

おっと。少女が目を覚ましたようだ。何も悪い事はしていない筈だが、なんとなくマズイ気がして急いで身を引いた。

「目が覚めたかい？」

私は出来るだけ優しげな声で尋ねた。少女の目はまだ眠そうでトロンとしていた。ボンヤリとした瞳は鮮やかな翠（グリーン）でため息が出そうな程美しく感じた。

「……んん～」

ゴシゴシと目を擦る少女。何だか猫を見ているようで微笑ましい。

少女はそれで完全に目を覚ましたようだ。ハッと此方を見やる。その目はさっきとは違いハッキリと見開かれている。

……何か嫌な予感がした。

「キャアァァァァァッ！」

その後、聞いた話では少女の叫び声がは家を突き破り隣家まで響いたらしい。嫌な予感というのは当たるものだ。

……待ってくれ。これでは私が何かしたみたいじゃないか。

一応言っておくが私に少女性愛の気は一切無い。まぁ一瞬カワイイとかは思ったが、こんな少女は私にとってそういう対象になりえない。

私は急いで少女の口に手を当てて声を止めた。

「むーむー」と喚いていたが、しばらくすると落ち着いたようだった。

少女に目配せして「落ち着いたか？」と尋ねると、彼女はコクコクと頷いた。

ゆっくりと口から手を離す。

「大丈夫か？」

ゼェゼェと荒く息をつく少女に私はもう一度尋ねた。

「は、はい……」

少女は少し怯えた様に話し出す。何だかその様子を可愛く感じた自分に対して凄く罪悪感と嫌悪を感じた。

「私は魔法学者をやっているジャス・クーランという者だ。昨日君を見つけたが怪我をしていたようだったから応急手当の為に家に連れてきた。言っておくが“仕方無く”だ。やましい事は一切考えていない」

ここまで否定するのはもしかして逆に怪しまれるかもしれないな。それに少女に対しても幾分失礼かもしれない。まぁ私にそういう噂が立つよりずっとマシだ。

「すいません……。助けて頂いたのに、その……あんな風に叫んじゃって……」

少女がションボリした様に口を開く。あんまり気を落とさせるのも悪い気がしたのでお茶を煎れてやった。最高級とまではいかないが、美味い茶だ。

「ほら、これでも飲め。リラックス出来るぞ」

そう言ってティーカップを差し出す。少女はゆっくりとそれを飲んだ。

少女が茶を飲みきったのを確認すると私はこう言ってみた。

「そういえば君を病院に連れていこうと思うのだが」

「ヤです」

「おぉう」

思わず声に出てしまったよ。こんなにもハッキリと拒絶されるとは思っていなかった。少しばかりショックだ。

「悪いが家(うち)じゃあちゃんとした君の治療が出来ない。病院に行ってくれないと困るのだが」

うん。ちゃんとした理由だ。彼女が何を嫌がっているのかは分からないが、自分の命が懸かればいくらなんでも首を縦に振るしかあるまい。

「嫌です！剥製にはされたくありません！」

「……は？」

今、この少女は何て言った？……剥製？

「……あ、アホか貴様。十年前ならいざ知らず、この時代に亜人の剥製なんざ作っても見世物にもなりゃせんわ」

「え？」

少女の顔は本当に驚いた時の顔だった。目は点になり口はあんぐりと開いている。

「それに病院といっても私の友人だ。万が一にも剥製なんかにはされんから安心しろ」

出来るだけ朗らかに、且つ優しげに言った。“逆に怪しまれる”な

んてことも無いように丁度良い案配で。

少女はそれを聞いて安心したのか長いため息をついた。

◇◆◇◆

その後どうにかこうにかして少女を医者の友人の元へ連れていった。
幸いな事に友人の病院は私の家からそう離れていないので少女には
適当な服を着せて出来るだけ怪しまれ無いように移動した。

病院へ行こう（前書き）

タイトル通り今回は病院へ行きます。

病院へ行こう

「とりあえず化膿止めを処方しておくよ。てゆーかこの子、凄い回復力だな」

医者の友人のマークが言った。悪いがファミリーネームは忘れた。スマン、マーク。

「昨日はかなり深い傷だったんだがなぁ」

少女の傷はもう粗方塞がっていた。まぁ治癒魔法も多少効いたんだろうが、それにしても凄い回復力だ。

「それで、あの少女の種族は分かったのか？」

「さぁね。正直サッパリさ」

やれやれとマークが首を振る。彼は私と違ってかなりまとも、且つ優秀な人間だ。そんな彼でも分からないというのだから、多分他の誰に聞いても分からないだろう。

「なら彼女の食性とかは分かるか？」

試しに聞いてみた。

「食性？オイオイジャス！もしかして一緒に住むとか言わないでくれよ！？」

「おっと、そう言ったらどうするんだ？」

少しも悪びれずに言ってやった。マークは今度は深いため息をついていた。

「前々から変人だとは思っていたが、種族もわからん奴と一緒に住むとはね」

少しムカリとした。
その辺の木偶(デク)みたいな奴から「変人」と言われるのにはもう慣れたが、友人と認めた人間から言われるのは初めてだった。何だか心がチクリと痛んだ。

「まぁ歯の形状や透視魔法(スキャン)で見た骨格から鑑みるに、彼女の食べる物は僕達とそう変わらないだろう」

「好き嫌いはあるだろうけど」と付け加えると彼はカルテを私に軽く投げ渡した。
私は医療分野は専門じゃないんだが、と思いつつもカルテを眺めた。転写(コピー)魔法の応用で描かれた彼女の骨格は確かに人間の標本と変わらなかった。私の見た標本には角は無かったが。

そうこうしていると服を着替えた少女が奥から出てきた。元はマークの妹の物だったというワンピースを着ていた。

「案外似合うじゃないか」

というのはマークの言だ。それには私も素直に共感した。彼女の揺れる赤髪が白いワンピースによく映えていた。

「そういえばジャス。この子の名前は聞いているのかい？」

マークが突然そんなことを尋ねてきた。そういえば昨日も今朝もゴタゴタしていて名前を聞くどころではなかった気がする。

「君、名前はなんていうんだい？」

私がその事を伝えるとマークはまるで子供に言うように彼女に聞いた。いや実際子供なのだろうが。

「ま、マナです」

少女は弱々しく答えた。彼女の声が弱々しいのはどうもデフォルトらしい。まぁ何か事情もあるかもしれないが、生まれ持った気質という事もある。あまり深く足を踏み入れない方がいいだろうな。

「マナか」

「うん良い名前だね」

マナ――何処かの言葉で“自然のエネルギーの根源”みたいな意味だったと思う。

まぁ良い名前なんじゃないだろうか。私にはそういうセンスが皆無だからイマイチわからないが。

「突然だがマナ、行く所は有るのか」

「い、いえ……、村は焼き払われました。家族も……」

「焼き払われた……って……」

「大戦の名残だろう。僻地ではよくある話らしいが、王都近くでは珍しいな」

予想外の重い話にマークが驚き、傍目にもわかる程落ち込む。私はというと内心驚いたが恐らくマーク程ではない。だが、この少女には同情してしまう。

話には聞いていたが、まさかその被害者がこんな近くにいるとは思わなかったのだ。

「行く場所が無いなら……。マナ、私の家(うち)に来ないか？」

「……え？」

同情からの言葉だったのか……。それは私にも分からない。もしかすると興味本位だったのかもしれない。

だが私は感じたのだ。この少女を――おこがましいが“守らなければ”と。

そしてマナは言った。

「……よろしくお願いします」

と。

博士の心労（前書き）

心労と言いつつもハッキリ言うとのろけです。

博士の心労

マナが家に来て数日が経った。彼女は私の苦手な掃除や洗濯といった家事全般が得意で、そういった事の一切を引き受けてくれた。

「博士！ご飯作りました！」

あの時のマナは慣れない環境に怯えていただけらしい。我が家にも慣れた今ではすっかり元気だ。
最近はこんな風に進んで飯まで用意してくれている。

しかし私はどうにも物好きなようだ。正体のわからん亜人の少女を家に迎え入れるとは……。おまけに飯まで作らせている。
あの提案をした時もマークは呆れた様に溜め息をついていた。実際呆れていたのだろうが。

そんなことを考えているとマナが後ろから私の首に腕を回してきた。

「博士ぇー、ご飯食べましょうよぉー」

きゅうきゅうと首を絞めてくるマナ。甘えているのだ。

あれから彼女に話を聞いた。彼女の歳、好物や嫌いな物、得意な事に苦手な事。共同生活を送る上で必要な事はある程度聞いた。

その結果、彼女は１４歳という事がわかった。家事全般が得意で最も得意な事は狩りらしい（狩りが家事全般の中に入るかどうかはわからないが）。苦手な事は特には無く、強いて言えば争い事だと言

っていた。後、好物は卵で嫌いな物は野菜だ。どうやら彼女の種族は肉食派らしい。

「今日もオムレツ作ったんですよー」

実は私の好物も卵だ。野菜は嫌いという程ではないが苦手だ。案外彼女とは趣味嗜好が似ているらしい。

彼女があまりにも甘えてくるのでそのまま背負って一階のダイニングまで降りた。ちなみに今まで私が居たのは二階の書斎だ。

そういえば彼女はしっかりしているが、かなりの甘えたれでもある。こんな風に引っ付いてくる事くらいならまだいい。この間なんかは寝ている間に私の毛布に入り込んでいた。ベッドや家具はまだ買っていなかったが、万が一にも間違いが起こらないように私はあの日以来椅子で眠る様にしていた。それでも入り込んできたのだ。こんなストレスフルの日々になるのなら一緒に住むなんて言うんじゃなかったと軽く後悔もし始めていた。

ダイニングのテーブルには豪華……とまではいかないが旨そうな夕食が用意されていた。
パン、スープ、それとマナ渾身のオムレツだ。

私とマナは互いに向き合う形で席に着く。
彼女はどうやら早く夕食を食べたくてウズウズしているようだった。
だが私はそれを手で制する。

この国では食事の前に神に祈る習慣がある。食事を与えてくださる

神に感謝……という所だろう。
だが私は神という物をあまり信じてはいない。感謝を捧げるのも神というのは、どうにも的外れな気がしてならないのだ。昔、遠い東国には命を与えてくれている食材自体に感謝するという習慣があるという話を聞いた事がある。神に感謝を捧げるよりもそちらの方にどことなく説得力を感じた私は、それ以来東国の習慣に習う様にしている。

私とマナは手を組んで食材に感謝の言葉を捧げる。

「「いただきます」」

マナは直ぐにオムレツに手をつけた。ナイフで一口大に切りフォークを突き刺しまっすぐに口へ運ぶ。そして咀嚼し、飲み込む。

しかし彼女は本当に旨そうに飯を食べる。これほど旨く食ってくれれば食材としても本望だろう、という考えが頭によぎった。

◇◆◇◆

食事を終え、後片付けをしているとマナが突然こんなことを言ってきた。

「そういえば博士はなんで私と一緒に寝てくれないんですか？」

あまりに驚いてさっき食べたパンやオムレツを吹き出してしまいそ

うになった。

「あのな、女の子がそういう事をあんまり言うな」

私はその後こってりとモラルとか様々な事をマナに言い聞かせてやった。

どうにも彼女は純粋すぎるようで……、そうだ。明日にでも彼女の家具を一式買おう。そうしよう。

これで私の心労も減ることだろう。

博士の心労（後書き）

いつもこの小説を読んでくださってありがとうございます。
よろしければ感想や評価もお願いします。

買い物に行こう？

その朝、毛布の中に自分以外の暖かさを感じた私は恐る恐る目を開いた。

思った通り彼女が居た。マナだ。すっかり安心した顔でスヤスヤ眠っている。

「またか」と思いつつも、私は彼女の髪を撫でてやった。彼女の髪の毛は私達人間のソレよりもずっと細い。その為、手触りは凄く滑らかでまるで絹糸の様な手触りだ。

「……ん」

とマナの口から声が漏れる。

起こしてしまったかもしれない。なんだか知らないが少しばかり罪悪感を感じる。

いやいや。昨日あれだけモラルたら何たらを教え込んでやったんだ。それを守らない彼女が悪い。ここは怒るべきだろう。

「マナ、起きなさい」

彼女の耳元で静かに言ってやった。彼女は毛布の中でもぞもぞと動くと、やっと目を覚ましたようだった。

「あ……おはようございます、博士。なんで一緒に寝てるんですか？」

まだ半分夢の国にいるような声で尋ねてきた。

「さぁな、寝惚けてたんじゃないか？」

「わぁー、博士は寂しがり屋ですか」

……ん？

「待て待て、何故私が寂しがり屋なんだ？」

わからなかったから聞いてみる。すると彼女の口からは予想外の言葉が飛び出た。

「だって寝ている間にボクの毛布に入ってくるなんて……博士もカワイイ所あるんですね」

……。

「ふざけるな。私が寂しいなど思う訳が無い。とっとと離れなさい」

考えるよりも先に口を突いて言葉が出た。私はその事に少しばかり驚いた。まさかまだあの事を忘れられないなんて。

少々厳しい言葉だったと直ぐに反省した。言おうとして言った事でないにしろ、マナには悪い事をしてしまった。

マナは相変わらず私の毛布の中で引っ付いていたがションボリと耳が垂れ下がっていた。

「……悪かったな」

そう言いながら頭を撫でてやるとマナは「ふわぁ」と声を漏らした。

それから彼女を引き剥がして、毛布も片付けた。相変わらず椅子で眠るのは慣れない。身体中から鈍い痛みを感じる。

私は朝にシャワーを浴びる事を習慣にしている。今まではその後に朝食を作って食べていたが、最近はシャワーの間にマナが作ってくれている。

流石に彼女も風呂にまでは着いてこない。ちなみにマナ自身は夜に風呂に入っている。

今朝もいつも通りシャワーを済ますとマナの作った朝食のいい匂いが漂ってきた。

体をタオルで拭き、服を着替えてダイニングへ移動する。

テーブルの上にはパンとハムエッグ、それからサラダが有った。

夕食の時と同じように私達は向き合って椅子に座る。マナはまだ少し眠いようで目を擦っていた。

「今日は買い物に行こうかと思っているのだが」

食事中に私はマナに言ってみた。無論、買う物は昨日確認した通り彼女のベッドや家具だ。その事を彼女に伝えると、

「ベッドはおっきなヤツが良いです」

と言っていた。理由は聞かなかった。……なんとなく嫌な予感がしたからだ。ここ最近の私の『嫌な予感』は当たる、残念だが。

食事を終えると出かけの準備をする。私はちょっとばかし上等なコートを着込み、マナはマークから貰った服からお気に入りの物に着替えた。

「服も新しく買うか」

私が言うとマナはパアッと顔を明るくさせて私の方を向く。亜人といってもやはり１４歳の女の子なのだろう。オシャレには興味津々の年頃だしな。

この分だと家具を買うよりも服を買うのに時間がかかりそうで不安になった。

買い物に行こう？

私達が住んでいるこの国はリンギン王国という名前だ。名前からもわかる通り王制であり、国の中心には大きな城が聳えている。海と山に囲まれ、資源的にも経済的にも恵まれた国だ。しかしほんの十年前まで隣国のオークスと戦争をやっていた。オークスは亜人の国だ。終戦を迎えたのはちょうど私が１６歳の頃だった。

だが今ではそのオークスとも良好な関係を築いている。一部では戦争の名残でマナが体験したような事が行われているらしい……。嘆かわしい事だがな。

まぁ長々と説明してしまったが、私は王都に住んでいる。城下町だ。そして今はその町へ買い物をしている。

マナが家（うち）に住む為に彼女のベッドやその他の家具、服等を買う為だ。

「まずは家具からだ、行くぞ」

私はそう言うとマナの手を引いて家具屋に足を運んだ。彼女は少し顔を赤らめていた。

家具などそうそう買う物じゃない。私が店に入ると店主も多少驚いたような顔をしていた。それが何故かはあまり考えたくは無い。

「クーランさんじゃないですか。今日はまたどういった御用で？」

筋肉モリモリのガタイのいい店主が私に尋ねてきた。

店主はその強面と風貌で怖い人だとよく勘違いされるらしいが、そんなことはない。彼は非常に優しい性格だ。その証拠と言えるかは分からないが、彼の声は彼自身の性格を表しているように暖かみと柔らかさを帯びている。

「ベッド等を買おうかと思ってね」

そう言って傍らのマナに目をやる。店主も同じようにマナを見る。すると彼は突然ニヤニヤと笑いだした。

「……どうした」

「いえいえ、クーランさんも案外隅に置けないなぁと思いまして」

私が尋ねると彼はそう答えた。どうにも勘違いをされているようだ。

「こんな可愛い恋人がいらっしゃったなんて……ダブルベッドにしますか？」

「違う、恋人じゃない」

私は店主の言葉が言い終わらないうちに直ぐ様反論した。変に勘違いされているだろう、とは思ったが“恋人”とは……。私はそういう趣味があるとでも思われているのだろうか。そう思うと少し悲しくなった。

「冗談ですよ、マークさんから聞きました。大変ですね、亜人の子なんて」

店主は朗らかな笑みを浮かべていた。
全く意地の悪い事だ。そう思うが彼も軽い冗談のつもりだったのだろう。もしかすると私が過剰に考え過ぎているのかもしれないな。
「ハハハ」等と笑いながら彼は私とマナを店の奥まで入れてくれた。
そこには今朝マナが言っていた通りの大きなベッドが有った。

「博士、私これがいいです！」

マナは目をキラキラと輝かせているし、店主もニコニコと微笑んでいるし、なんとなく逃げ場の無かった私はそのままそのベッドを買う事にした。

「ベッドの後は服ですね」

「あぁ、そうだな」

マナの言う通り、私達は服を買うために家具屋を後にした。あのベッドは後で店主が家に運んでくれるらしい。

しかし私は不安だった。
さっきはすんなりと済んだが、女性の買い物はえらく長いと聞く。
マナも一応女の子である。
その事を考えると私の足取りは重くなるのだった。

買い物に行こう？（前書き）

なんだか文章がどんどんダメになっていっている気がします……。
みなさんはどう思いますか……？

買い物に行こう？

私は現在服屋にいる。マナの服を買うためにやって来たのだが、店に居る男が私一人だけというのはどうなのだろう……。いささか居心地が悪い。

マナはすっかり服を選ぶのに夢中だ。店に入った途端キラキラと目を輝かせて選び始めてしまったのだ。

「はぁ……」

私の重い溜め息は店の空気に溶けていった。

◇◆◇◆

「待てぇ！」

オリーブ色の制服を着た女が男を追いかけていた。男は三人、いずれもどこにでも居るようなチンピラだ。

「言われて待つ奴がいるかよッ！」

男の一人が吠える。三人とも手には紙幣をこれでもかという程持っている。男達はついさっき強盗を行なってきたのだ。

「止まんねーと捕まえるぞチクショー！」

今度は女が叫んだ。
彼女の名前はカーラ・アールジーン。
彼女の着ている制服は軍服だ。つまり彼女は軍人なのだ。この国にはきちんと警察機関があるが、軍人にも犯罪者を逮捕する権利が与えられている。
強盗の現場に偶然居合わせたカーラはその正義感と勇気を以て犯人を逮捕しようとしていたのだ。

石畳の上をドタドタと大きな音を立てて男三人と女が駆け抜ける。
大きな交差点に差し掛かった時、男達は残念にも同じように右へ方向転換した。

「てめえ何やってんだ！」

「皆同じ方に逃げたらダメだろ！？」

「バカかよ！」

三人が思い思いにお互いを罵倒する。しかし残念だがバカは三人ともである。

「やったぜ！あいつらバカだ！」

女が勝利を確信して軽くガッツポーズをする。
だが次の瞬間、通りの服屋から目の前に二人の人物が出てきた。少女と背の高い青年だ。

「しめた！」

チンピラの一人はそう言うと、どこからかナイフを取り出して少女

に突きつけた。そのままチンピラは少女の首をガッチリと腕で捕まえると人質にしてジリジリと女と距離をとる。

「てめえ等、卑怯だぞ！」

「卑怯もクソもあるかよ！」

女が憎々しげに吠える。彼女の手には既に銃が握られているが、一般市民を巻き込む訳にはいかない。悔しくて噛んだ唇から少し血が滲む。

「おい、このままトンズラするぞ！」

三人の中で最も体の大きな男が残りの二人に声をかける。どうやらあの大柄の男がリーダー各のようだ。

――このまま逃げられるなんて……！

女がそう思った瞬間、

「待て」

と横から声がした。

見れば人質の少女と一緒に店から出てきた青年だった。青年の顔からは恐れも驚きも伺えない。むしろ少しイラついているようだ。

「貴様等がどこから、いくら金を盗んだかはどうでもいい。だがマナを連れて行くのは私が許さん」

青年はそう言うと三人に手をかざす。すると男達は凍りついたよう

に動きを止めた。

――まさか、魔法？

「今だ、マナを助けてチンピラを逮捕しろ」

カーラが一瞬驚いていると青年が話しかけてくる。高圧的でカーラの神経を逆撫でする様な物言いだった。

「わ、わかってるよ！」

そう言うとカーラは男の腕から少女を奪い返し、そのまま手錠を使って三人のチンピラを逮捕する。その手際は流れる様に素早かった。やはり訓練を受けた軍人と言うべきか。

「あー、さっきは逮捕にご協力ありがとうございましたー」

カーラが青年に礼を言う。その声には驚く程心が込もっていなかった。もちろんカーラは頭も下げなかった。カーラはこの青年の様な高圧的な態度の人間が大嫌いなのだ。

「スイマセンがお名前と住所を教えて頂けませんかー、決まりなんで」

心の込もっていない声で続けて青年に話しかける。これも一応規則なのだから仕方無い。

「私はジャス・クーランという。職業は魔法学者。君は？」

「え、オレ？」

思わずカーラは聞き返した。こういう高圧的な態度の人間は社交性など持ち合わせていないと思って居たからだ。
おまけにこのジャスという青年は自分を『魔法学者』だと言った。魔法学者は傲慢で独善的な人間ばかりだというのが通説だ。

「そうだ、名前は？」

「あ、カーラ・アールジーンです……」

目の前のジャスという青年の言葉にカーラは戸惑いながらも返事をした。そんなカーラに対してジャスは

「いい名前だな。よろしく、カーラ・アールジーン」

と右手を差し出した。

「はあ、よろしく……」

カーラは様々な事に驚きながらもジャスの右手を取って握手を交わした。ジャスの右手は魔法学者というには少しばかり固かった。
これがカーラ・アールジーンと変人学者ジャス・クーランの初めての出会いとなった。

マナはその様子をちょっと恨めしそうに見ていた。

博士の憂鬱？

私は最近おかしい。断言しよう。

道で出会った軍人と握手するなど以前の私なら考えられなかった筈だ。これもマナがやって来た事による変化なのだろうか。だとしたらこれは良い方向への変化なのか、悪い方向への変化なのか……。

「……はぁ」

私は書斎の机の上で重い溜め息をついた。最近、溜め息が癖になっている気がするな……。

全てをマナのせいにはしたくないが、彼女が来てからストレスが多い気がする。そもそもは彼女を迎える事にした私自身が悪いのだろうが……。

まぁしかし、マナだけなら私の心にも整理がつく。私が問題視しているのはマナとは別の、もう一人の“彼女”の事だ。

「よーう博士！こんな部屋にずっと居るとカビ生えちまうぜー！」

……今、私の部屋にドアを開ける轟音と共に飛び込んできた女性――カーラ・アールジーンの事だ。彼女はこないだのあの騒動以来、何かと私の家に来るようになった。

「パトロールはいいのか」と尋ねると「んなモン、ポリの連中にさせときゃいいんだよ」と言っていた。相変わらず軍部というのはいい加減な奴らばかりだ。

「何か用か、カーラ・アールジーン」

「いやよぅ、パトロールがあんまり暇だからバックレてきた」
不機嫌に尋ねる私に彼女は悪びれもせずに、むしろピースサインをしながら答えた。多少頭に来たが、そこは自分は大人なのだと言い聞かせて気持ちを落ち着かせる。
「残念だが家(うち)は休憩所じゃないぞ」
「大体似たようなモンだろ。茶は美味いし、マナちゃんはカワイイし」
そこに丁度いいタイミングでマナが茶の入ったカップと茶菓子を持ってくる。
「気ィ使わなくてもいいんだぜ？」
カーラはマナからカップと茶菓子の皿を受け取るとそう言った。全くだ。こんな奴に気を使う必要などない。
言葉遣いも性格も荒く、礼儀もわきまえないこんな女に。……いや、本当に女なのか？
疑問に思った私は、観察も兼ねて椅子の背もたれを前にしてだらしなく座るカーラをじっと眺めてみた。丁度カーラは大口を開けて茶菓子のケーキを丸々口に放り込もうとしている所だった。
と、突然そこで彼女の動きが止まる。
「ふぁひふぃへんふぁほ」

大口を開けたままカーラが私に尋ねる。
「大人の女性のする事じゃないぞ」と私は思ったのだが、よく見ると彼女の頬は薄く赤らんでいた。彼女も少しは恥じらいを持っているという事か。
カーラは大きく一口ケーキにかじりつくと、モシャモシャゴックンと飲み込み、私をその少し赤らんだ顔のまま睨んだ。

「……ンな見つめんなよ、恥ずかしいだろ」

「誰が見つめるか」

「ちぇー、からかい甲斐の無ぇヤツだなー」

口を尖らせ文句を垂れるカーラ。それは軍人としての顔ではなく、イタズラ好きの少女の顔だった。

「仲がいいですね」

とその時、マナが再び部屋へと入ってくる。どうやら朝食の片付けが終わったようだ。
しかしどういう事だろう。彼女の声には幾らか怒気が感じられた。私は何か悪い事でもしただろうか。

「博士もデレデレしないでください！」

どうやら私に怒っているようだ。しかし私はデレデレしていたか？誰に？もしかしてカーラにだろうか……。

「勘弁してくれ、誰もデレデレなどしていない」

私は何故か怒っているマナを宥(なだ)めようと焦る。しかしマナはプイッと顔をそっぽへ向けてしまい話を聞いてはくれない。誤解だと言うのに……。
マナと私のその様子を見てカーラは何か企んだ様にニヤニヤ笑っている。くそ、他人事(ひとごと)だと思いよって。大体、全てコイツの所為(せい)なのに。

◇◆◇◆

「じゃーなー」

手を振ってカーラが帰っていく。友達の家に遊びに来ていたような軽さだ。

「さようならー」

マナも私の横で手を振る。見送りはとりあえずの礼儀だから、私も一応家の外までは見送りにきた。

あれからどうにかこうにかマナを宥め賺(すか)して話を聞いてもらった。状況は一応理解したらしいが納得は出来ていないようだった。やはり私がカーラにデレデレしていた様に見えたのが原因らしい。

『私はデレデレしていないし、そもそも恋愛などにあまり興味が無い』

そう言うとマナは今度は少し涙ぐんでいた。私は悪気があった訳では無かったのだが、『恋愛に興味が無い』という言葉が彼女を傷付

けたのだろうか。という事はマナは私に恋愛感情があるという事か？

いや、それは飛躍し過ぎだろうな。私の様な人間を好きになる者など居ない。ましてやマナの様な純真な子なら特に。

私は人を愛する事も人に愛される事も許されていない人間なのだから。

博士の過去？（前書き）

今回は博士の過去を少しだけ出そうと思います。本当に少しだけ、匂わす程度ですが。

博士の過去？

私の書斎には調度品の類いは殆ど無い。しかし壁に一つだけ飾っている物がある。
湾曲した柄を持つ片刃の剣だ。銃の様な特殊な形状のこの剣は私が昔に使っていた物だ。

私がこの剣を飾っているのは自分に対する戒めの様な物だ。
私は罪深い人間だ。他人（ひと）には……特にマナにはあまり知られたく無い様な過去がある。この事を彼女が知れば、彼女はもう私に笑顔を見せてくれることは無いだろう。

そう思いながら、私はボンヤリと壁に飾られている剣を眺めていた。

「マナには話しておくべきだろうか……」

私は静かに一人ごちた。

「何を話すんですか？」

するといつの間に居たのか、後ろからマナが声をかけてきた。振り向いて見ればマナは不安げな表情をしていた。私はそんな彼女の頭を撫でる。マナはくすぐったそうに目を細めた。

最近この動作が癖、までいかなくともある種の習慣になってきている気がする。

「マナ、私の過去の事なんだがな……」

私は絞り出すように喋りだした。本当にマナに話すべきなのだろうか？彼女は知らなくとも良い話ではないのだろうか。

私の心は未だ迷っていた。次の言葉が出てこない。

「……博士」

迷う私にマナが声をかけた。彼女の声も絞り出すような……不安げな声だった。

「……辛いなら、喋らなくてもいいですよ」

「え？」

「博士、泣いてます……」

はっと気付いた私は自分の目元を指で拭ってみた。指は濡れていた。どうやら私は本当に、自分でも気付かないうちに泣いていたようだ。

「辛いなら、言わなくてもいいです。何も言わなくていいですから」

マナが私に抱き着いてくる。

自分が泣いていた事に驚いていた私は、それを予想できずに何もせずに普通に受け止めてしまった。

「泣かないで下さい、博士。いつもの仏頂面でいてください」

そう言ってマナは私を抱き締める腕の力を強める。苦しいくらいに彼女は私を抱き締めてくる。

その力が私にはどこか心地よく、甘えてしまいたくなった。気付けば私はマナの体を抱き締めて静かに涙を溢していた。

「あぁ、ありがとう……。すまないな、マナ……」

そう言って私はマナを抱き締めて涙を流した。

教師クーラン？

「おい博士、これってどうやるんだよ？」

カーラが私に尋ねてくる。彼女の手には少し厚い魔法学の本があり、彼女はどうやらそれに書かれている事がよく分からないようだった。

「見せてみろ」

書斎の椅子にかけて自分の仕事をしていた私は彼女の元まで行って、持っていた本を取ってよく見てみた。表紙に“基本魔法教本”と書かれているのを見て、私は「こんな物も理解できずにどうやって軍人になったんだ」と少しゲンナリした。

肝心の中身を見ると開かれていたページは“拘束魔法の応用”のページだった。私がカーラに出会った時に使った魔法の基本となる技術のページだ。

私は実際にカーラにやってみせた。もっとも、前にやったよりもずっとゆっくりと分かりやすくだが。

それを見てカーラは「ほうほう」と頷いていた。

カーラが私の書斎で本を読んでいたのには訳がある。

その“訳”というのも大したことは無い。彼女はどこかで私が魔法学者であるという事を知ったらしく、私に魔法を教えてくれと頼んできたのだ。

私はその頼みを聞いた時、正直面倒だった。それに私の専門は人に

魔法を教える事では無く、より少ない魔力でどれだけ効率良く魔法が使えるかという研究だ。
一度は断ったのだが、カーラが「どうしても」と頼み込んでくるので仕方無くＯＫを出してしまったのだ。

「カーラ」

「なんだよ」

私が呼び掛けるとカーラはぶっきらぼうに答えた。「相変わらず口が悪い」と思ったが、今は彼女は一応私の生徒だ。口には出さないでおいた。

「テストだ。コイツの動きを止めてみろ」

そう言って私は机の下から小さなハツカネズミの入ったケージを取り出す。これはこの魔法のテストの為に数日前に捕まえた物だ。

人間の様な大きな物の動きを止めるには、このような小さな物から練習するのが丁度良い。もっともネズミ程度を止められなければ、その先は無理だと諦めるしかないのだが。

「ネズミかぁ、カワイイなぁ」

カーラは目を輝かせて言った。彼女はそのガサツな性格に対して割と小さい物や可愛らしい物が好きらしい。前にもマナに小さなぬいぐるみを作って来た事があった。やはり性格がアレでも女の子であるという事か。

「コイツで実際にやればいいんだな？」

カーラはそう言いながら股の間にケージを抱えてドカリと床に座り込む。彼女がケージに手をかざすと掌から淡い光が溢れ出す。

この光は魔力が目に見える形になった物だ。その色は人によって様々だが、大抵はその人の瞳と同じ色をしている。

カーラの光も彼女の瞳と同じ紫色だった。

ちなみに私は魔力の色は白だが、瞳は翠色だ。

いずれマナの物も見ておきたい、と少し思った。

カーラの光は薄く広がり、ネズミの体の周りに漂い出す。しばらくするとネズミはジタバタともがき始め、そのうちに古い機械の様にギシギシと動きを止め始めた。

――成功か。

対象が小さいだけあって動きを止めるのが早かった。しかし、それ以上にカーラは筋が良いようだ。ひょっとするとひょっとするかもしれない。

だがそれゆえに残念にも思えた。

魔法を感覚的に使っている天才肌の魔法使いというのは、理論的に理解して使っている者に対して魔力を効率良く使えていない事が多い。つまり燃費が悪いのだ。私が過去にそうであったように。

まぁそれに関しては練習や勉強次第でどうにでもなる。それに天才肌の者が理論的に理解した場合は非常に強力な魔法使いになる可能

性が高い。

カーラには魔法の基礎からしっかり教えてやろう、と私は深く思った。

教師クーラン？

「だから体に力を入れずにリラックスした方が魔法の威力が上がるんだ」

私は昔使っていた小さめのサイズの黒板を物置から引っ張り出して、カーラの授業に使っていた。カーラに教えるようになってから気付いた事だが、私はどうやら形から入るタイプらしい。

「だから、それはなんでなんだよ？悪いが私は頭悪いぜ？」

何故か自信満々にカーラに言われてしまった。今のセリフのどこに胸を張るポイントがあったのだろうか。

そんな事を考えつつも私は黒板に新しく図を書く。

人間を簡略化したような図とその体を循環するエネルギーを矢印で表現する。矢印は言うまでもなく人間の持つ魔力だ。

「魔力というのは体全体で循環しているエネルギーだ。そこに余計な力が加わるとその循環に狂いが生じてしまう」

「ここまでは分かるな？」と尋ねるとカーラは無言でコクコクと頷いていた。こうして真面目に話を聞くこともできるじゃないか。私はなんとなく気分が良くなった。

「だから体から極力余計な力を抜いてリラックスするんだ。これで魔力は体の中の隅々まで行き渡る様になる」

黒板の矢印に沿って指を動かす。それを見たカーラは「なるほど」

と頷いていた。
「今日の授業はとりあえずここまでかな」と思った私は黒板を片付けようとした。小さめのサイズといってもそれなりに大きな黒板だ。ガタガタと揺らしながら書斎の机の横まで持って行く。
「おい、もう終わりか？アタシはもっとやってもいいんだぜ？」
「バカ言え。君は基本すらよくわかっていないだろう。少しずつだ」
「ちぇー」
とカーラは唇を尖らせる。その様子が子供の様で可愛らしいと思ったのは秘密にしておきたい。
「まぁ、そう気落ちするな。そうだ、マナのケーキを食べようか」
私が提案するとカーラの顔はパアッと輝きを増す。まったくコイツは子供みたいで扱いやすい。その内お菓子で誘拐されたりしないだろうな……。
「今、失礼な事考えただろ」
カーラが私の顔を睨んで言ってきた。案外に鋭い発言に私は少し動揺してしまう。
「そんなことはないぞ？」
出来るだけ平静を装ってみたが、どうやら彼女はそんなことお見通しらしくジットリとした視線で私を睨んでいた。私はいたたまれなくなり、なんとなく逃げ出すようにダイニングまで降りていった。

◇◆◇◆

「それにしてもマナちゃんはスゲーな」

と突然にカーラが口を開いた。ケーキを食べている途中だったのか、口はモフモフと動いている。行儀が悪いとは思ったが、このくらいはいつもの事だから注意はしない。した所で彼女が直すとは思えんしな。

「そんなこと無いですよぉ」

カーラの言葉にマナは謙遜したように顔を赤らめる。しかし耳は元気良くパタパタと動いており、彼女は本当は嬉しくてたまらないであろう事を伺わせた。

「謙遜すんなよ。なぁ、博士もそう思うよなぁ」

「あ、あぁ。そうだな。私でもこんなに旨くケーキを作れない。誇って良い事だと思うぞ」

話は突然に私に振られた。まったくの予想外だったので、少ししどろもどろになってしまったかもしれないが、まぁ素直にマナに対して賞賛の言葉を伝える事ができたと思う。しかし私に話を振ってきたカーラの口元には少しだがクリームがついている。私にはそれがどうにも我慢ならない。

「クリームがついているぞ」

私がそう注意するとカーラは少し照れ臭そうにしてクリームをナプ

キンで拭き取った。その様子は今までと少し違って、優雅にも思えた。
彼女はもしかすると意外にも貴族の出だったりするのかもしれない。一瞬、そう考えたが直ぐに改めた。貴族ならクリームが口の周りにつくような食べ方はしないはずだ。

「博士」

私がそんなことを考えていると、マナが声をかけてきた。その瞳には何故か期待の色が見えた。

「どうした、マナ？」

「私も魔法を使いたいです！」

瞳をキラキラと輝かせてマナが要求してきた。その勢いで私は少し身をのけ反らせた。それほどまでに彼女は元気一杯に言ってきたのだ。

「わ、わかった。考えておこう」

その勢いに負けたのか、ついそう口を滑らせてしまう。しまった、と思ったがよく考えると少し前に私自身が「そうなった方が良い」と思ったではないか。それに彼女が魔法を使いたいと言うなら、それを叶えてあげるのが私の役目なんじゃないだろうか。

「わかった、だが明日からだ。良いな？」

指を立ててマナに言い聞かせた。マナはそれを聞いて少しガッカリしていた様だったが、同時に少し嬉しい様だった。

私はその様子をまるで父親のような気持ちで見ていた。

教師クーラン？（前書き）

更新が遅れてしまってすいませんでした。
スランプになってました……。実はまだ治ってないんですが、とりあえず書いてみました。
出来栄えはかなり悪いです。元々下手くそな文章がより酷いことになってます。

見捨てないでください。これからもこの作品をお願いします。

教師クーラン？

「み、見てください博士！ほら、ほら！」

そう言ってマナが手の平にある物を見せつけてくる。そこには拳大の火の玉があった。

この火の玉は彼女が魔法で作り出した物だ。初歩的な魔法なのだが、それでも初めて魔法を使う時はかなり苦戦するものだ。しかし彼女はものの数分でやってしまった。

これには流石に私も驚いた。恐らく、マナは魔法を使う上で大切な“リラックスする事”が上手いのだろう。これは他人（ひと）が教えてもなかなかマスター出来る物じゃない。ひとえに才能、もしくは練習の賜（たまもの）だ。マナのは恐らく才能だ。彼女にこんな才能があったとは、正直驚きだった。

「見てくださいよ博士ェ～」

「あぁ見てるぞ。マナ、凄いぞ」

手の平に火の玉を持ったままマナが擦り寄ってきた。よしよしと頭を撫でてやると、マナは目を細めて気持ち良さそうにしていた。

『上手くできたら褒める』。一応、私の教育方針である。

「……あれ？」

「どうした？」

頭を撫でてやっているとマナが奇妙な声をあげた。

「これ、どうやって消すんですか？」

「え？」

見ればマナの手の中では火の玉が子供の頭ほどまで大きくなっている。ついさっきまでは拳大だったのにえらく成長したものだ。やはりマナの魔法の才能は凄いようだ。器用だな。

……なんて考えてる場合ではない！少し焦げ臭い匂いも漂っているし、早く消さなければ最悪火事になるかもしれない。

「ど、どうしましょう、博士～？」

パニックになっているのか、マナは半泣きで私を見つめてくる。

「お、落ち着け。ゆっくり深呼吸しろ。魔力を止めるんだ」

この火の玉は魔法で作られた物だ。つまり魔力を燃料に燃え続けている。

という事は魔力の供給源であるマナがそれをやめれば火の玉も自然に消える筈なのだが……。

「どぉやるんですかぁ～！？」

どうやらマナはパニックになっているらしく、涙目で私に助けを求めてきた。

という私自身も軽いパニック状態である。

二人してわたわたとしている内に火の玉はまるで意思を持ったよう

にメラメラ、ウネウネと蛇のように蠢きはじめる。

まずい、魔法が暴走し始めている。

私がそう思ったと同時にバタン！と勢いよく書斎のドアが開かれバシャーンと何かが私たちにかけられた。

「だ、大丈夫か！？」

ドアの向こう側には水の滴るバケツを構えたカーラがいた。どうやらそのバケツで水をぶっかけて消火したらしい。ついでに私たちも水を被った訳だが……。

「……あぁ、とりあえずは大丈夫だ……」

◇◆◇◆

「……ふぇぷちっ」

私の隣でマナがかわいらしいくしゃみをした。一応シャワーを浴びて体を温めたが、どうやら冷えてしまったようだ。風邪をひいてないと良いんだが。

「悪いねマナちゃん。いきなり水ぶっかけちゃって」

カーラが申し訳なさそうに言った。さっきの事を申し訳なく思っているようだ。

というか私には何も言わんのか？

「いえ、大丈夫ですよぅ。カーラさんが火を消してくれなかったら大変な事になってたんですから……へ、へくちっ」

そう言ってくしゃみをするとマナは一口お茶を啜った。お茶は体が温まるようにミルクティーにして砂糖も多目に入れてある。

それを見ていた私も一口啜った。

……。

……。

……あ、そういえば。

「おいカーラ。そういえば今日はなんだ？　何か用があったんだろう？」

ミルクティーの入ったカップを置いて、私はカーラに尋ねた。

何も無いのにあんなにタイミング良く部屋に入って来られるだろうか。多分それは無い。……もっともカーラなら何も無くとも家に来そうだが。

「あぁそうそう。これをアンタに届けるように言われてさ」

カーラはそう言って懐から白い封筒を取り出すと私に手渡した。

それを受け取った私はじっくりと封筒を観察する。表には『ジャス・クーラン』とだけ宛名が書かれていた。

少し嫌な感じがしつつも裏返すと、太陽を模式化したような印で封をしていた。この印は……。

封筒を開いて中の紙を取り出す。
そこには

『二日以内に登院すること！』

と書かれており、差出人の名前も何も無かった。だが名前など書かれていなくとも私には分かる。コレを書いたのは奴だ。

「……仕事しろという事か」

手紙を見つめて私は今日もため息をついた。

ちょっと人物紹介（前書き）

作者はスランプみたいです。
全く書けません。

よくよく考えたら登場人物の紹介もやらずにいたので、息抜き的に人物紹介します。

ちょっと人物紹介

ジャス・クーラン
２６歳
一応この作品の主人公。
リンギン王国の公認魔法学者。
ある日道に倒れていた亜人の少女「マナ」を拾い、成り行きでその少女と一緒に住む事となった。
「いかにして強い魔法を少ない魔力で発動させるか」という研究をしている。
マナに対して特別な感情は特に持っていない。強いて言えば父親のような心境である。しかしマナ自身はそうではないらしく、妙に無防備かつ大胆なのでジャスとしてはハラハラしている。

リンギン王国の辺りでは珍しい黒髪。左目の下に傷痕がある。
普段は体にフィットするボディスーツの様な服の上にコートを着ている。
魔法学者であるがバランスよく鍛えた肉体だったり、軍部の内情に妙に詳しかったり、少し謎のある人物。
＞ｉ１６４３８―４０６＜

マナ
１４歳
一応この作品のヒロイン。
傷を負って倒れていた所をジャスに助けられた亜人の少女。成り行きでジャスと一緒に住む事になり現在は家事全般を任されている。
助けてくれたジャスに対して恩を感じており、同時に好意も感じている。ベッドに潜り込むのはその好意の表れなのだが、ジャス自身は困惑している。

赤い髪に猫のような耳を持ち、羊のような角まで生えている。種族は今のところ謎である。
＞ｉ１６４３９―４０６＜

カーラ・アールジーン
１８歳
いろいろあってジャス達と知り合った新米軍人。
口は悪いが正義感が強く、真っ直ぐな人物である。頭よりも体を使う方が得意で、魔法よりも格闘や銃撃などの方が得意。
しかし魔法が全く使えないかといえば、そうでもない。むしろ才能は有る方で、指導しているジャスも驚いていた。

肩まで金髪を伸ばしている。
制服は着崩している。仕事もよくサボってジャスの家に入り浸っている。問題児である。
＞ｉ１６４４０―４０６＜

ちょっと人物紹介（後書き）

調子に乗って挿絵とか入れてスイマセンでした。

文章も絵も中途半端だ、死にたくなる……。

感想頂けたら嬉しいです。

見捨てないで下さい。

いざ魔法研究院？（前書き）

久しぶりの投稿です。

いざ魔法研究院？

「むぅぅ……」

リンギン王国の中心、王都。さらに中心には城が聳えている。そしてそこから少し外れた所には軍の中央司令部、警察隊の司令部、最高裁判所、国立中央大図書館などが有り、まさにこの国の中枢部といえる。

そしてその中の一つに『国立魔法研究院』というものがある。この国の魔法研究の最高機関である。

昨日受け取った手紙はここからの物だ。

手紙の封蝋に有った『太陽の紋章』が、今私の目の前に聳える門のレリーフにも刻まれている。

私は『魔法学者』である。そして、その中でも『国家魔法学者』と呼ばれる種類の学者だ。魔法学者には大きく分けて二種類あり、一つは純粋に魔法の研究を行なっている只の『魔法学者』。そしてもう一つが研究する事で国から給与を与えられる『国家魔法学者』である。

国家魔法学者は国から給与を与えられ、研究を国に保護される代わりに、半年に一回は必ずこの魔法研究院まで自身の研究の報告に来なければいけない。

……という訳で、紛いなりにも国家魔法学者である私は半年に一回の研究報告の為にここまで足を運んだのだ。私の家から大して離れた場所でも無いので今日はマナは連れていない。

正直乗り気では無いが、研究報告をしないと国家学者の資格を剥奪されてしまうので仕方無い。

門の前に居る警備兵、警備球の許可を得て建物の中に入る。
約百年前から建っている歴史有る白の建物。中の装飾は素晴らしく、まるで城か聖堂を思わせる。この国の繁栄の象徴の様だ。相変わらず無駄に広くも感じるが、私は迷うこと無く受付へと向かう。

「ジャス・クーランだ」

と受付嬢に一言伝えて昨日届けられた封筒を提出する。
受付嬢は事務的に微笑むと院長室に入る許可証を差し出してきた。
どうやら話は通っていた様だ。
しかし毎回の事ながら何故か私は直接院長室に通される。本来は研究報告の為の窓口があるので、そこで手続きを行うのだが。
此処の院長とはちょっとした知り合いでもあるので顔を見てやるのも良いだろう。
そう思いながら、私は院長の居る部屋まで足を進めた。

話は変わるが、此処の警備はかなり厳重である。
、この国の魔法研究の中心なのだから当たり前ではあるのだが。

そこをすんなりと通される。所謂顔パスというやつだ。
しかしここまですんなりだと些か心配にもなってしまうという物だろう。顔を変える魔法だって存在するのだ。
無用心すぎやしないか。

そんなことを考えながら院内を歩く。階段を登り、長い廊下を歩くと目的の部屋が見えてきた。
私は伝統的かつ美術的な紋様が刻まれた扉の前に立つ。そして再び溜め息を一つ吐いた。この扉を開くのが大変に躊躇われた。

緊張しているのではない。ただ単純に嫌なのである。
しかし、このまま扉の前で悩んでいても埒が明かない。

そして私は意を決し、扉を開いた。
その時の私は戦地へ赴く兵士と何ら変わりは無かっただろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2268n/

変人博士と獣人少女

2011年12月11日18時53分発行